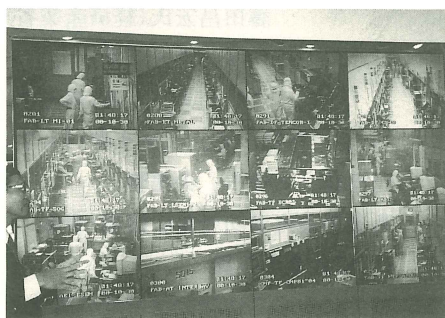


JSQCニュース No.226

発行 社団法人 日本品質管理学会 東京都杉並区高円寺南1-2-1 (株)日本科学技術連盟東高円寺ビル内
電話 03 (5378) 1506 FAX 03 (5378) 1507 ホームページ: http://jsqc.i-juse.co.jp/E-mail: jsqcapp@a1.mbn.or.jp

“台湾ハイテク企業に学ぶ” 研修チーム報告

東京理科大学 今井 雅浩



2000年10月29日から11月4日にかけて本学会主催“台湾ハイテク企業に学ぶ”研修チームが派遣され、半導体・ノート型パソコンメーカー等、台湾が世界に誇るハイテク企業6社を訪問した。経営者の講演を聴き、成功の秘訣について学ぶとともに、チームメンバー相互の意見交換を行い、これからの経営戦略ならびに品質戦略について研修することが目的であった。

本チームの大きな特徴は、研修先がアジアであるという点にある。1958年に第1回QCチームが渡米した。以後、欧米への研修チームは、多数派遣されてきた。アジアへは、調査団が派遣されたことはあったが、こちらが学ぶ研修目的でのチームは今回が初めてであると思う。

また、本チームに通訳が同行しなかったというのも大きな特徴の一つである。台湾ハイテク企業の隆盛を支える要因の一つとして、経営者・管理者の卓越した英語力が挙げられる。先方の説明を直接英語で聞き、また、質問・討論も英語で行うことにより、台湾企業の語学力を実感することも今回の研修の重要な目的の一つであった。

本チームは狩野紀昭学会長を団長に、社長・副社長・常務取締役等の経営者を含む企業関係者15名、大学関係者6名、事務局1名、計22名で構成された。団員の年齢層は20代から60代までの幅広い層

から構成されていた。

10月30日は、新竹科学工業団地にあるUnited Microelectronics Corp. (UMC)を訪問した。UMCでは、1日かけて経営理念・経営方針・品質戦略等を聴いた。団員は旅の疲れも見せず講演に集中し、活発な質疑を行っていた。ホテルに戻っても議論は続き、団員が狩野団長の部屋に集まり2時間以上も議論を重ねた。散会したのは、11時近くである。

10月31日は、午前中に新竹科学工業団地のAcer Inc.とMediaTek Inc.を見学した。Acer社では、ノート型パソコン製造ラインを見学することができた。

午後はWorld Wiser Electronics Inc. (WWEI)を見学した。WWEIからホテルまでは移動に1時間ほど要したが、移動中も盛んに議論がなされた。無論、1時間の移動時間だけでは不足、ホテル到着後も狩野団長の部屋に集まり、さらに2時間ほど議論するほどの過熱ぶりであった。

11月1日は、桃園にあるASUSTek Computer Inc.とRITEK Corp.を訪問した。当日は運悪く台湾一帯が台風の直撃を受けてしまった。豪雨のために、桃園一帯は停電したが、両社とも非常用電源を回すことにより、議論の場を確保してくれた。そのような状況下での議論が白熱しないわけではなく、予定を大幅に延長して議論が行われた。

夜は、場所を台北に移し、UMC GroupのChairperson, Bob Tsao氏の講演を聴き、その後会食をした。団員は会食の場を借りて意見交換を行い、終了時刻があったという間に訪れてしまった。

11月2日、3日はAsia Quality Symposium主催の工場見学および研究発表会に参加した。そして、11月4日に現地に

て解散した。

今回訪問した台湾企業に対しては、どの企業もQCにひたむきに取り組んでいるという印象を持った。多くの工場に品質スローガンと品質関連のグラフが貼ってあり、従業員が品質を常時意識できる環境であると感じた。さらに、トップ・マネジメントが前面に立ってQCを推進している印象を受けた。

英語に関しては、使えて当たり前、使えないトップはいない、という状況であり、英語を半公用語としている感があった。本チームの特徴の一つとして“通訳無し”をあげたが、台湾ハイテク企業ではもはや“通訳無し”が当たり前のようである。

1980年に放送されたNBC放送「If Japan Can, Why Can't We...?」が与えたインパクトは大きい。この報告が、「If Taiwan Can, Why Can't We...?」というインパクトを得るきっかけになれば目的は達せられたものと考えてる。

本チームが台湾ハイテク企業から得たものは非常に多い。かの偉大な数学者フェルマーではないが、その全てを記すには与えられた紙面が少なすぎる。幸い、フェルマーの最終定理が360年後に証明されたのとは異なり、「品質」Vol.31, No.2に「報告」として、詳細が掲載される予定である。



「品質」誌、投稿論文の募集!

会員の方々からの積極的な投稿をお勧めします。投稿区分は、報文、技術ノート、調査研究論文、応用研究論文、投稿論説、クオリティーレポート、レター、QCサロンです。

「品質」誌編集委員会

私の提言

品質に関連する“際”

東京理科大学工学部助教授
山田 秀



偉大な発見は、学際的な領域で生まれることが多いと聞いた記憶があります。

これを少し拡大して考えると、活動、学問、組織等について何をやるべきかがはっきりしない場合には、「際(きわ)」を探ることがその解決の糸口になると思われます。活動、学問、組織等の“際”は、その中核をしっかり把握すること、そして現在の領域外のものもを考慮することにより見出されることが思われます。

この中核、領域外という見方を品質管理活動に照らし合わせると、定義は人により異なるものの「データ解析の強調」、「金銭面で見た効果」という言葉で特徴づけられるシックスシグマが思い出されます。なぜなら、品質管理活動の中核が事実(データ)から有意義な情報を得て品質保証に活用することであり、また、品質管理分野では領域外のように扱われてきたコストも強調しているからです。

日本品質管理学会の中核は、産学協同で品質に関する学理・技術を追求し実践することでしょう。ここで述べたいのは、シックスシグマ活動の合理性、非合理性ではなく、このような海外での動きに対する日本品質管理学会員の取り組み方です。すなわち、産学協同で質に関する学理・技術を追求し実践する立場から言えば、このような海外での活動に関する議論が日本品質管理学会員間であるべきでしょうが、Quality Progress誌における記事等、品質関連の海外雑誌に目すらを通さずに、「あんなの寄せ集め」、「今までと何が違うの」と評論している姿勢が意外に多いというのが現状に思えます。

品質管理に関連する“際”を探索するために、品質管理の中核を今一度見つめなおす活動を開始してはどうでしょうか?そして、地理的な面、対象の面で従来の品質管理の領域外に出た活動を進めてはどうでしょうか?そうすることにより、品質管理に関連する“際”が見え、次への方向が見えてくると思えます。日本品質管理学会がある種の“際”にいることは、入会後数十年が経過した私が今でも年齢的な意味で若手であることから明らかです。しかし、私個人は悲観的になっていません。その理由は、人は“際”にいと予想外の力を発揮するからです。締切り際にこの原稿をまとめ、あらためて“際”の力を認識しました。

事業案内ウラ面に続く

事業案内

●第67回研究発表会(本部) 発表募集

日時: 2001年5月26日(土)10:00~17:00

会場: 日本科学技術連盟・本部

(1)申込期限

発表申込締切 3月30日(金)	アブストラクト: 200字以内 テーマ、発表者名、連絡先記入 発表申込書が着き次第要旨「原稿の書き方」等を送付します。
予稿原稿締切 5月7日(月)必着	(22字×40行×2段)×4枚以内
参加申込締切 5月16日(水)	3月下旬に研究発表会ご案内(付)参加申込書を送付します。

※発表資格: 正会員・準会員・名誉会員・申請中可

(2)研究発表・事例発表の申込方法

同封申込書どおり、会員NO.氏名(発表者には○印を記入)、発表テーマ、勤務先、

電話番号、連絡先を明記のうえ、アブストラクトを添えて上記期日までに事務局宛 E-mail: jsqcapp@a1.mbn.or.jp またはFAXにて送付ください。

(3)参加申込方法

参加申込書に所定の事項を記入のうえ、本部事務局までお申込みください。

●第80回シンポジウム(本部)

日時: 2001年4月19日(木)9:25~17:20

会場: 日本科学技術連盟・東高円寺ビル

テーマ: 「変革するITとTQM」

内容: 基調講演「変革するITとTQM」
圓川隆夫氏(東京工業大学)

特別講演「第3世代のインターネット」
加藤浩一氏(マイクロソフトコーポレーション)

事例発表(1)「商品開発におけるIT活用と、今後の展開」
大矢武二氏(マツダ)

事例発表(2)依頼中

申込締切: 2001年4月5日(木) 定員: 150名

参加費: 会 員5,000円(締切後5,500円)

非会員7,000円(締切後7,500円)

準会員2,500円 学生(一般)3,500円

申込方法: 同封の参加申込書に所定の事項を記入のうえ、お申込みください。

研究会だより('00. 8 月～'01. 1 月)	
◆テクノメトリックス研究会 (9 月 9 日, 12 月 9 日) 1. 選挙結果の関するデータ解析 2. 非対称的判別分析 3. Local likelihood inference on process capability 4. 多重比較 (Dunnettの方法と Williamsの方法) についての質問 5. 科研基盤研究とのジョイント研究集会 ◆医療経営の総合的「質」研究会 (10月21日, 11月11日, 1 月26日) 1. 医療の標準化とマネジドケアの質経営(田村) 2. 規制改革委員会公開討論会報告(光藤) 3. 管理項目について/歯科医療研究事例報告(赤尾) 4. 対策の考え方とその道具立てについて(光藤) 5. ヒューマンエラーの管理技術について(光藤) 6. ハワイの医療事情について(松井) ◆ISO9000's審査研究会(新規) (12月 9 日) 1. 研究会立ち上げ趣旨説明 2. 現状の問題点討議/進め方検討	◆ナレッジマネジメントとQFD研究会 (8 月23日, 9 月20日, 10月25日, 11月29日) 1. ケアとQFDについて 2. 知識創造について 3. ナレッジマネジメントとQCサークル活動(杉浦) 4. 設計変更件数の低減について(布施) ◆複合技術領域における人間行動研究会 (10月 4 日, 11月20日, 12月25日, 1 月19日) 1. 製造現場におけるヒューマンエラーの防止(新出) 2. 医療現場における事故事例の分析(富岡) 3. KT法応用ドラマ手法における記述方法の改善(太田) 4. 医療におけるリストマネジメント(平澤) 5. 製品使用時のヒューマンエラーの予測(佐井) 6. マニュアル使用時の情報の見逃しに関する研究(塩沢) 7. 市販後報告制度について 8. 市場型製品事故未然防止について 9. 情報システム学シンポジウムの検討
「複合技術領域における人間行動研究」近況報告 一人間を中心としたシステム安全学の体系化を目指してー 主 査 中條武志 (中央大学) 近年, 原子力, 医療, 航空などの様々な分野において組織における人の行動が引き金となって発生した事故が社会的な問題となっています。これらの事故は信頼性・安全性を確保するための強固なしくみが人の介在によっていかに容易に崩れ得るかを示しています。安全獲得のためには, ハードウェア技術の向上に努めるだけでなく, 人間を視野の中心において, 人の特性を考慮したマネジメントや設計を考えることが重要となってきたと言えます。 本研究会では, このような立場から, 様々な分野における事故事例の調査・研究を通して, 進歩の激しい複合技術領域における人間行動とそれによって事故が引き起こされるメカニズムを解明し, 品質管理の立場からこのような事故を防ぐ上で有効な方法論を提案することを目的に活動しています。進め方としては, 1 ヶ月に 1 回の頻度で会合を開き, メンバ	
事 業 案 内	
●第78回講演会(関西) 日 時: 2001年 3 月30日(金)14:00～17:00 会 場: (大阪)中央電気倶楽部 5 階ホール テーマ: 「IT経営と新品質革命を実現する21世紀のものづくりとは」 内 容: (1)ERP・SCMと生産現場をつなぐキーテクノロジー: MES (2)第 4 世代の品質管理～新品質革命に向けてのMESデータ活用事例～ 講 師: 中村 実氏 日本アイ・ピー・エム 申込方法: 同封の申込書で関西支部へお申込みください。 ●第23回クオリティパブ(本部) 日 時: 2001年 3 月 2 日(金)18:00～20:30 会 場: 日本科学技術連盟・東高円寺ビル テーマ: 「マイクロソフト, ルーセント他のTQM事情ー米国優良企業を訪問してー」	ゲスト: 坂 康夫氏 日本電気 品質推進部長 会 費: 会員2,000円 非会員2,500円 準会員・学生一般1,500円(含軽食) 申込方法: 氏名, 所属, 連絡先を記し本部宛 (FAX03-5378-1507) お申込みください。(定員: 30名) ●第269回事業所見学会(本部) 日 時: 2001年 4 月26日(木)13:00～15:10 見学先: (株)ジーシー 富士小山工場 テーマ: 「GQMによる品質の作り込み」 定 員: 30名 (定員締め切り) 同業者の方はご遠慮ください。 参加費: 会 員2,500円 準会員1,500円 非会員3,500円 学 生2,000円 申込方法: 同封の参加申込書に所定の事項を記入のうえ, お申し込みください。 申込締切: 2001年 4 月12日(木)

新規研究会を受付ます
研究開発委員会では, 本年度に設置する新規公募研究会の申請を受け付けます。奮って申請してください。 とくに若手会員を主査とする研究会を歓迎いたします。 研究期間: 平成13年 4 月～平成14年 3 月 (1 年間) 申請方法: 「新規研究会設置申請書」を事務局へご請求ください。 申請書にご記入のうえ, 郵送で本部事務局宛にお送り下さい。 申請締切: 平成13年 3 月19日(月)必着 なお, 来年度 (平成13年10月～14年 9 月) 新設の研究会については, 平成13年 6 月に申請を受け付けます。 研究会の申請と運営: ○研究会の申請にあたり, 申請者は共同研究者 (学界, 産業界) を 8 ～10人位事前に働きかけて集め, 申請書に記入する。理事会承認後JSQCニュースでメンバーを公募する。 ○研究目的と年間の研究会活動計画案を作成する。 ○1 研究会のメンバー数は20人まで。 ○会場は原則として日本科学技術連盟東高円寺ビル会議室。 ○時間は18時～20時。ただし会場の都合がつけば午後でも可。食事支給。 ○研究会運営費は 1 人 1 回当り1,150円 (内訳: 通信費, 資料代, 食事代) ただし年間開催数は11回を限度とする。
（勸神奈川科学技術アカデミー 研究助成募集
助成対象分野: 理学・基礎工学系, 工学系, 化学系, 生物・農学系, 医学系 募集対象: 神奈川県内在勤または在住の若手研究者(おおむね40歳以下) 助成金額: 助成限度予定額50万円以内 応募方法: 募集要項をご請求ください。 申請書の様式は下記のホームページからダウンロードできます。 http://home.ksp.or.jp/kast/ 応募締切: 平成13年 4 月10日(火) ※詳細は下記までお問い合わせください。 勸神奈川科学技術アカデミー 教育交流部 交流普及課 〒213-0012 川崎市高津区坂戸3-2-1 KSP西棟614 TEL 044-819-2032 FAX 044-819-2097 E-mail: sc@kast.or.jp
15th Asia Quality Symposium 2001 Seoul 開催のお知らせ
期 日: 2001年11月 9 日(金)～10日(土) 開催場所: 韓国・ソウル郊外 申込締切: 2001年 6 月18日(月) 原稿締切: 2001年 9 月 3 日(月) 申し込み等については詳細案内と申込書を 3 月末にお送りいたします。 <注意事項> ・発表, 質疑応答は英語で行います。 ・研究は未発表のものに限ります。
中部支部の住所が変わりました。
〒460-0008 (電話番号は変更なし) 名古屋市中区栄2-6-1白川ビル別館 7 階 (勸)日本規格協会 名古屋支部内

創立30周年記念事業のお知らせ 30周年記念事業実行委員会
既に皆様ご存知の通り, 本年度は当学会創立30周年に当たっております。当学会では, この30周年を記念して, 以下に示す幾つかの事業を企画し, 30周年記念事業実行委員会を中心に, その実現に向けた活動を日々精力的に展開しております。 1. 記念シンポジウムの開催 開催日時: 2001年5月25日(金)13時半～ 開催会場: 早稲田大学 井深ホール メインテーマ: 21世紀の経営とクオリティ 基調講演: 椎名武雄氏 (日本IBM) パネル討論: 高橋 朗氏 (デンソー) 藤田昌宏氏(経済産業省) 伊藤元重氏 (東京大学) 当学会より 1 名(選考中) (司会) 狩野紀昭氏 (東京理科大学) 2. 記念誌『あゆみ』の発刊 3. 品質管理推進功労賞の設置/表彰 4. QC相談室の設置 5. 社会に対する情報発信機能の強化 6. 会員サービス向上施策の実施 7. 各支部での記念講演会 上記の各事業は, 既にその内容が確定したもの, まだ検討段階にあるもの等, それぞれ進行状況に若干のバラツキは見られますが, 今後, 各事業の内容が固まり次第, 適宜, ニュース等の手段を通じて会員の皆様にもその概要をお知らせして参りますので, ご期待頂くと共に, 本事業成功のため, 会員皆様のご支援・ご協力も切にお願い申し上げる次第です。
（勸大川情報通信基金 2001年度研究助成募集
助成対象分野: 基礎分野, 通信・インターネット分野, コンピュータシステム分野, 人工知能分野, バイオ分野, 応用分野, 人文・社会科学分野 助成対象者: 情報・通信分野に関連する研究機関, 教育機関における研究者 助成金: 原則として一件あたり100万円。 助成期間: 原則として 1 年間。 応募方法: 下記までお問い合わせください。 勸大川情報通信基金 事務局 〒163-0227 東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル27F 勸CSK内 TEL 03-5321-3958 FAX 03-5321-3959 E-mail OOKAWAKIKIN.KD@cii.csk.co.jp URL http://www.csk.co.jp/tof/
2000年12月の入会者紹介
2000年12月19日の理事会において, 下記のとおり正会員 8 名, 準会員 1 名, 賛助会員 1 社 1 口の入会が承認された。 (正会員) 8 名 ○土田秀次郎(日本電気), ○佐藤隆司(マネジメントシステム評価センター), ○山本啓之 (サン・エージェンシー), ○榊原裕 (ノリタケ機材), ○家入善彦(家入技術士事務所), ○川上隆司 (きたなか), ○岩佐允勝(東洋電機製造), ○三戸辰雄(アイホン) (準会員) 1 名 ○島倉大輔 (電気通信大学) (賛助会員) 1 社 1 口 ○佐多商会 (品質保証部長 名本 洋) 正会員: 2599名 賛助会員: 186社, 210口 準会員: 123名 公共会員: 21 口